

二〇二二年度入学試験問題

国

語

(五〇分)

第一回 二月一日実施

〔注意〕 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。  
問題用紙も提出しなさい。

吉祥女子中学校



美知代たちは、修学旅行のために発足したしおり作成委員会で作業しています。この場面が書かれた次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

しおり作成委員会のリーダーは美知代だ。そして、美知代がいるところには、取り巻きのふたりも必ずいる。その流れで、同じ行動班である愛季とむつ美も、しおり作成委員会のメンバーとなっていた。

「えっ、それ、自分たちで描いたの？」

愛季が、口元に手を当て、ガタツと椅子から立ち上がる。背中をまるめてせせとイラストを描いていた女子ふたりが、照れたように、だれどこか誇らしげに笑い合う。

「すごい、上手！ちゃんと全部見てみたい」

愛季が、自分の机から身を乗り出したので、連動して美知代の机まで少し動いた。ボールペンで書いていた文字が、少しズレる。

美知代は修正ペンを上下に振り、カチャカチャと音をたてた。

美知代たちに加えてしおり作成委員会に参加してきた女子ふたりは、いつも教室の隅でノートにイラストを描いて見せ合っているような子たちだった。このふたりはもつぱら、しおりの余白に載せるためのイラストをせせと描いている。紙の上の女の子たちはみんな、マンガに出てくる高校生のような制服を着て笑っている。襟元に大きなリボンがついていて、ミニスカートから伸びる足がすらりと長い。ソフトクリームや大人が持つような大きなカメラを持っているところから見ても、どうやら自分たちのことを描いているわけではないらしい。

この子たちには、読みやすいしおりを作ろうという気持ちはない。美知代は思った。背景や、描くのが難しそうな靴などが都合よく切り取られた、空想の中のさらに楽しいところだけを抽出したようなイラストを描きたいだけなのだ。

美知代は、白い修正液にふうふうと息を吹きかける。鉛筆の下書きの部分が消しゴムで消す作業は、取り巻きのふたりがやってく

れる。修正液のところは、消しゴムで強くこすらないように気をつけてもらわなければならない。

イラストは有志のふたり、鉛筆での下書きは取り巻きのふたり、文字の部分を書き清書するのは美知代。美知代が明言するわけでもなく、自然とそういうふうに仕事は分担されていた。その結果、班ごとに振り分けられているページは、愛季とむつ美が担当することになった。

美知代は、ていねいに、ていねいにボールペンを動かしていく。修学旅行の前日、みんなが一番しつかりと読むであろう持ち物のページだ。地図、筆箱、ハンカチ、ティッシュ。このページが終わったら、美知代はいよいよ、表紙に手をつけるつもりでいる。

みんなが必ず見るしおりの表紙。クラスのみんなどころか、その親や、先生の目にも必ず触れる。

「アッキー」

美知代は愛季を呼ぶと、ふうと息を吐いた。

「班ごとのページ、あと提出してないのどこ？」

きれいに、かつ、間違っまちがてはいけない状態で字を書き続けていると、体がみしみしと疲つかれる。美知代は自ら清書したページを手に取り、全体像を眺ながめた。

きれいで、読みやすい字だ。

「もうほっとんどのところからは返ってきてるんだけど」ちょっと待ってね、と、愛季が各班から集められている用紙を確認する。

「女子の班からは全部返ってきてるし、私たちのももうすぐできるから……」

男子もわりと出してくれてるはず、と、語尾ごびを伸ばしたと思うと、

「あつ。ねえ、美知代ちゃん」

と、愛季が突然、声を弾はませた。こちらのほうに動く細い首は、くるんと、おもちゃのような音が鳴りそうだと思つた。

「しおりの表紙、むっちゃちゃんにも書いてもらわない？」

「え？」

愛季は、ある一枚の紙を指でつまんだ。

「ほら見て、むっちゃん、すごく字がきれいなもの」

きれいにむけた果物の皮をひろげるように、愛季は誇らしげな顔でその紙をピンと伸ばした。

「字だけじゃなくてね、絵とか、字を飾り付けたりするのも上手なの。美知代ちゃん、他のページの清書で大変そうだから、一枚くらいむっちゃんにもやってみてもらうよ」

「うつま」取り巻きどちらかの声が、美知代の耳たぶをかすめる。

かわいい形で描かれた文字に影がつけられていて、文字ひとつひとつが立体的に浮かび上がっているように見える。バランスよくスペースが分けられているから、ひとつひとつの寺、その歴史がとも読みやすい。文字はまるで教科書に載っているもののように美しく、ところどころに描かれているとぼけた仏像のイラストがとてもかわいらしかった。

むつ美は恥ずかしそうにうつむいている。自由にうねる髪の毛は、雨に降られた野良犬の毛のようだ。その謙虚さを前面に押し出した振る舞いに、美知代は全身の真ん中にある心臓の毛が逆立つ思いがした。

むつ美の作ったページは、その場の誰が見ても、美知代のそれよりも美しく、読みやすかった。

「一枚くらいむっちゃんにやってみてもらったほうが美知代ちゃんもラクじゃない？」

美知代をいつのまにかちゃん付けで呼んでいたように、愛季は、いつしかむつ美のことをむっちゃんと呼ぶようになっていた。

「ほら、手だってこんなに汚れちゃってるよ」

愛季は、ひよいと美知代の右手首を握った。小指の付け根から手首にかけて、鉛筆の黒鉛がこすれて真っ黒になってしまっている。

「ピアノの伴奏は私が手伝うから、しおりはむっちゃんに手伝ってもらおうよ。美知代ちゃん、なんでもひとりだけでやろうとしすぎだ

よ」

「ねえ」

思わず少し低くなってしまうた声を、美知代は整える。

「あそこの班って、しおり、提出してる？」

ほらあそこ、と、美知代は改めて思い出すフリをする。

「壮太君のところ」

美知代がそう言うのと、せっせとイラストを描いていた女子ふたりが、ちらりと教室の隅のほうに視線を泳がせた。このふたりは、クラスの女子の中でも特に、壮太のことを怖こわがっているように見えた。教室の隅には、ただ寄せ合っているだけの机がある。机の上には紙もペンも載っていないし、机の主もない。壮太の班は今日もまた、資料集めという名目①で図書室に遊びに行っているみたいだ。

「今日中に提出って言ったのに、しかたないな」

壮太君いつもこういうのちゃんとやらないんだから、と、美知代が立ち上がると、取り巻きふたりが椅子を少しずらずらして道を空けた。とても自然な動作だった。

⑤ 「私、ちよつと図書室見てくるね」

そう言うと、美知代はひとり、教室を出た。

ぐ、ぐ、と足を踏ふみ出していく。ゴムでできた上履うわばきの底が、リノリウムの廊下ろうかをぎゅう、ぎゅう、と少しずつ少しずつ潰つぶしていく。

学級委員。

理科の実験。

砂鉄。

伴奏。

しおりの表紙。

むつ美。

⑥ うまくいっていたのに。ずっと。あの教室の中で。

「ハイ、おれいま図書室から出てるからセーフセーフ！」

突然、図書室のドアから壮太が飛び出て来た。「あぶねっ！」すぐに、何かをかわすように身をよじる。スリッパだ。図書室の中から飛んできたスリッパが、壮太に当たることなく、廊下の壁かべにぶつかった。中には司書もいないのだろうか、男子たちが好き勝手に騒さわいでいる声が聞こえてくる。

「……なんだよ」

その場に突き刺ささったように立っている美知代に、壮太が気づく。

「呪にらんでんなよ」

みんなが怖がっている五十嵐壮太。最近いがらしは、眉まゆが薄うすくなっただけではなくて、どこか髪の毛も茶色あはっぽくなったような気がする。中学生のお兄さんから、髪の毛の色を変える方法を教えてもらったのだろうか。

「……学級委員？」

壮太が一瞬いっしゅん、真顔になる。あのイラストばかり描いているふたりも、むつ美も愛季も、こうして壮太と真正面まへむかひに向き合うことはできない。

「五十嵐君」

しおり、提出してよ。

そう言うつもりだった。だけど、少し大きなTシャツの首元からよきによきと伸びている首と、その真ん中で隆起りゅうきしている小さ

な喉<sup>のど</sup>ぼとけを見ていると、全く違う言葉が美知代の口をついて出てきた。

「修学旅行の自由行動、一緒にまわろうよ」

図書室のドアが、内側から閉められる。第三ラウンド、かいしー！ という声が、ドアの向こう側から聞こえてきた。

「自由行動？ お前らの班と？」

廊下に残されてしまった壮太は、靴下だけを履いた右足の爪先<sup>つまさき</sup>で、左足のふくらはぎのあたりをかいた。

美知代は、自分がどうしてこんなことを言ってしまったのかわからなかった。けれど不思議と、堂々としていられた。

壮太は美知代を見ている。この人はおでこが狭<sup>せま</sup>い、と、美知代は思った。

「……お前の班のメンバーって、誰」

細い眉の動きに伴<sup>ともな</sup>って、その小さな額も少しだけ波打つ。

「私と」美知代は唾<sup>つば</sup>をぐくと飲む。「いつも一緒にいるさっちゃん<sup>⑦</sup>とゆっこ、……あと、むっちゃんと」

「明元むつ美？」

うげえ、と、壮太は何かを吐くような動作をした。窓の外は、いま自分たちがいる空間は宇宙と一続きになっていることがよくわかるような青空で、それに比べると壮太の動作はなんだかとてもかわいらしいもののように見えた。

「そんな言い方しちゃダメだよ」

「だって明元むつ美って」

ありえねえだろ、と、図書室に戻<sup>もど</sup>ろうとした壮太の動きが、ぴたっと止まった。

背後から、声が聞こえる。

美知代は、青空のその向こうにある宇宙に、そのまま吸い込ま<sup>こ</sup>まれてしまうような気がした。

美知代ちゃん。



遠くの方から、そう呼ばれている。美知代ちゃん。

「……自由行動、いいよ、別に」

美知代が何か言うより早く、壮太はそう言った。そのとき、壮太の首が少し、斜めに伸びていた。

⑧ 美知代は、その首の角度を見たことがあると思った。

「美知代ちゃん」

自分を呼ぶ声が、ついにはつきりと聞こえた。美知代は振り返る。

「ごめん、五十嵐君たちの班のページ、あったー」

そこには、白い紙を持って立っている愛季がいた。「もう提出してもらってみたい」美知代たちのものと比べると空白がとても多いその紙は、確かに、壮太たちの班のものようだった。

壮太はあのと、少しだけ首を伸ばして、指揮者の向こう側でピアノを弾いている愛季のことを見ていた。

「ごめんね、さつき見逃してみたいで」

はあ、はあ、と、小さな口から息を漏らしながら、愛季が両膝に手をつけて自らの体を支えている。小さなてのひらが、もっと小さな膝小僧を隠して、<sup>⑨</sup>もっともっと小さな美知代の心は、火で炙ったマシユマロのように一瞬で溶けた。

美知代は前に向き直る。

壮太はもう、図書室に戻っていた。

問一 ～～～～線⑦「もっぱら」・～～～～線①「名目」とはどのような意味ですか。もっとも適当なものを次の1～4からそれぞれ一つ

選び、番号で答えなさい。

⑦「もっぱら」

- |   |     |   |      |   |      |   |        |
|---|-----|---|------|---|------|---|--------|
| 1 | いつも | 2 | ひたすら | 3 | すすんで | 4 | たのしそくに |
|---|-----|---|------|---|------|---|--------|

①「名目」

- |   |                            |   |          |
|---|----------------------------|---|----------|
| 1 | もっともらしいこじつけ                | 2 | 反対できない行動 |
| 3 | おおげさな理屈 <small>りくつ</small> | 4 | 表向きの理由   |

問二 ——線①「イラスト」とありますが、美知代はこれをどのようなイラストだと思っ  
ていますか。文中から二十五字以上三十字

以内でぬき出し、初めの四字を書きなさい。

問三 ——線②「美知代が明言するわけでもなく、自然とそういうふう  
に仕事は分担されていた」とありますが、これはどういうこ

とですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 しおり作成委員会の中では美知代が望んだわけではないのに、偶然ぐうぜんにも美知代以外の班員が清書きんじゆをすることを望んでいなかったというこ  
と。

2 しおり作成委員会の中では美知代が特に指示しなくても、班員が仕事にあふれないようにめいめいの役割がなんとなく決まっ  
ていたということ。

3 しおり作成委員会の中では美知代がはっきり言わなくても、美知代に都合なようにおのずとみんなの仕事が割り振られてい  
たということ。

4 しおり作成委員会の中では美知代が頼たのんだわけではないのに、美知代が苦手なことはしなくてもいいように誰かが引き受けて  
くれていたということ。

**問四** 愛季はむつ美の才能を高く評価しています。それがわかるような愛季の態度がたとえて表されているところを、文中から十五字以上二十字以内でぬき出し、初めの五字を書きなさい。

**問五** 文中の★の部分「かわいい形で描かれたく読みやすかった」にはむつ美が作成したページについて書かれています。むつ美が作成したページはどのような点がすぐれていますか。四十字以上五十字以内で具体的に説明しなさい。

**問六** ——線③「美知代は全身の真ん中にある心臓の毛が逆立つ思いがした」とありますが、この時の美知代の気持ちを説明したもののとしてもっとも適当なものを次の1〜4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 むつ美が作ったページの出来栄できばえは自分が思いえがくような仕上がりにではない上に、ほめられたことを偉えらぶるでもなく素直すなおに喜ぶむつ美の姿に心底嫌気いやけがさした。

2 表紙をむつ美に分担してもらおうという愛季の提案は不快である上に、今まで従順だったむつ美がそれを辞退するそぶりをまったく見せないことが自信の表れのように見えて、内心恐怖きょうふを感じた。

3 むつ美が持つイラストの才能を今初めて知った衝撃しやうげきは大きく平常心を保てないでいるが、目の前のむつ美はあくまで控ひかえめで、そのふるまいに嫌悪感けんおかんを抱いた。

4 委員長としては愛季の意見を取り入れるべきだと理解するのだが、ここでむつ美に表紙を描く機会を与あたえたらむつ美が目ざれ、今後自分の影響えいきやうりよく力が弱くなってしまうのではないかと心配した。

問七 ——線④「取り巻きふたりが椅子を少しずらして道を空けた。とても自然な動作だった」について、

(1) 「取り巻きふたり」はそれぞれどのように呼ばれていますか。文中からぬき出して答えなさい。

(2) 「とても自然な動作だった」からわかることとしてもつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 取り巻きふたりは美知代が勇気を出して壮太の班に苦情を言うわかり、あわてて通り道を作っている。
- 2 取り巻きふたりは美知代の言動を無条件に受け入れ、その行動に協力的な態度を無意識にとっている。
- 3 取り巻きふたりは美知代を常に恐れていて、いつもその行動を先読みして意にそうよう心がけている。
- 4 取り巻きふたりと美知代は信頼し合っていて、言葉にしなくてもお互いの行動が手に取るようにわかっている。

問八 ——線⑤「私、ちょっと図書室見てくるね」そう言うと、美知代はひとり、教室を出た」とありますが、なぜこのような行

動をとったのですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 愛季からの唐突で無神経な提案が気にさわり、この不愉快な状況からいったん逃れようと思ったから。
- 2 愛季の提案をうけいれるつもりはなかったが、怒ったまま断りたくはなかったので時間をかせごうとしたから。
- 3 このまま愛季の提案を無視し続ければ、愛季自身がこの提案が突拍子もないものだったことに気づくだろうと考えたから。
- 4 愛季の提案は一方的なものだったし、それより今日中に班ごとのページを回収することの方が先だと判断したから。

問九 ———線⑥「うまくいっていたのに。ずっと。あの教室の中で」について、

(1) ———線⑥で使われている表現技法と同じものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 立春を過ぎて、春の足音が聞こえてきた。
  - 2 お礼はいりません、大した品物ではないから。
  - 3 空に大根のうす切りのような月が浮かんでいる。
  - 4 草木もかれ、人に嫌がられる冬。
- (2) 「うまくいっていた」とはどういうことですか。四十字以上五十字以内で具体的に説明しなさい。

問十 ———線⑦「窓の外は、いま自分たちがいる空間は宇宙と一続きになっていることがよくわかるような青空で、それに比べると

壮太の動作はなんだかとてもかわいらしいもののように見えた」とありますが、ここから美知代は壮太をどのように見ていることがわかりますか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 強がることで気の弱さを隠そうとふるまっている。
- 2 怖そうな外見にひょうきんさを隠している。
- 3 幼稚な行動の中に意地の悪さがひそんでいる。
- 4 不良っぽさには不似合いな意外な幼さを持っている。

問十一——線⑧「美知代は、その首の角度を見たことがあると思った」とありますが、これは美知代が何を思い出したということですか。もつとも適当なものを次の1〜4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 壮太のTシャツの首元からよきによきと伸びている首を見ていたときのこと。
- 2 愛季の「美知代ちゃん」という声に気付いたときに壮太の動きが止まったこと。
- 3 壮太が指揮者の向こう側でピアノを弾いている愛季の姿をじっと見ていたこと。
- 4 壮太が興味のないことを言われたときには首を斜めに伸ばすくせがあること。

問十二——線⑨「もつともつと小さな美知代の心は、火で炙<sup>あぶ</sup>ったマシユマロのように一瞬で溶<sup>と</sup>けた」とありますが、この時の美知代の気持ちとしてもつとも適当なものを次の1〜4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 壮太が自分の班と自由行動を一緒にしてもよいという気持ちになるほど、愛季は何もかもが可愛<sup>かわい</sup>らしいということをつくづく感じて、一気に自信を失った。
- 2 容姿ばかりでなく仕草や話し方まで何もかもが可愛らしい愛季を見て、同じ女子としてとうていかなわないものを感じ、急にわけもなく嫉妬<sup>しつと</sup>した。
- 3 自分の勘違<sup>かんちが</sup>いからしおりのページが一枚提出されていないと言い張って、愛季によけいな苦労や手間をかけさせたことに対し、とつさに申し訳<sup>わけ</sup>なく思った。
- 4 壮太たちの班行動のページはもう提出されていたのに、調べもせずにしつこく追及<sup>ついまく</sup>したのは学級委員にあるまじき落ち度であつたとわかり、すぐに恥じ入った。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

私ははじめに、哲学とはものごとについて「自分で考える方法」だと言いました。そしてまた、とくに「自己自身について考える方法」だとも言いました。というのは、近代哲学では、とくにこの「自己」自身について考えるためのすぐれた原理が、積み上げられてきたからです（ただし、十分に理解されているとは言えません）。

近代以後の哲学は大きく二つの課題をもっている。一つは人間関係や社会をうまく調整するために必要な智慧を蓄えること。もう一つは、個々人がよく生きるための考えを成熟させることです。そして、**A**ので、やはり基本は「自己了解」の智慧という点にある。

\* カントによると、各人が、自己の「道德」のルール（よし悪しのルール）を、自分の理性の力で内的に打ち立てる点に、近代人の「道德」の本質がある。たしかにその通りですが、私はこれにつけくわえて、そのためには、人は、青年期のうちに、それまで形成されてきた「自己ルール」の形をはっきり了解しなおす必要がある、と言いたいと思います。

では、どうしたら自分の「自己ルール」を了解しなおすことができるか。いくつかポイントがあります。まず重要なのは、言葉が①たまること②です。

われわれは教育で、少しずつごく日常で使う言葉以外のいろんな言葉を覚えていくのだけど、自分を理解するのに必要な言葉がたまってくるのは、ふつうは高校から大学にかけてです。象徴的に言えば、それは「批評する言葉」としてたまってくる。

中学、高校くらいになると、誰でも、まず親に対して批判的になって、批判の言葉をもちます。お母さんはいつも口うるさいけ

注 \*カント……ドイツの哲学者。

\*理性……筋道を立てて物事を考える能力。

ど、自分はきまぐれだとか、お父さんはいつも威張<sup>いば</sup>っているけどほんとは気が小さい、とか考えるようになる。

子供は、自分はまだ親に養われていて一人前ではないのだけど、周りのいろんなことを批判する言葉をもちはじめる。これがいわば人間の心の「自由」の開始点です。哲学ではこれを「自己意識の自由」と言います。「自己意識」の内側では自分のまわりのどんなことも批判できる。でも、まだ言葉が十分に成熟しないあいだは、子供の「批判」は、単なる不平不満、つまりこれこれは「気に入らない」、です。

中学生や高校生どうしでは、趣味<sup>しゅみ</sup>があうことが大事で、趣味があうと友だちになれる。「私、椎名林檎<sup>しいなりんご</sup>、好き」「うそ、私も大好き！ やったー！」「あの映画見た？ めっちゃよかったよね？」「うんすごーく、よかったー！」「でも、私、あれは嫌い、ダメー！」「そう、私も。超ダメー！」。これが中学、高校生の趣味的「批判」ごっこです。好き嫌いがあるだけの批判です。

しかし、大学生くらいになると、「批判」はすこしずつ「批評」になってゆく。「私、あの音楽大好き、なぜって、ここのフレーズとこの歌詞がぴったりあってるんだ」「あー、わかる、だけど、ちょっとイントロはゆるくない？」

「批評」は、単なる「好き嫌いの批判」ではなく、好きときらいの理由<sup>りゆう</sup>が入っています。好き嫌いの理由がちゃんと見えるようになると、趣味は「批評」に近づく。で友だちづきあいも、単に好きな者<sup>もの</sup>どうしではなく、趣味の違い<sup>ちがひ</sup>が許容できるつきあいになる。つまり、趣味自体よりも、美意識をちゃんともっているかどうかが問題になります。ともあれ、このことがとても大事だが、

「批評」ができるには「言葉」がたまらないといけない。

友だちどうしで「批評」がしあえる、というのは、じつは、互<sup>たが</sup>いに「自己ルール」を交換<sup>こうかん</sup>しあっているということです。「自己ルール」とは、その人がいつの間にか身につけている「よいー悪い」のルール、また「美醜<sup>びしゅう</sup>」のルールです。「美醜のルール」は簡単に言うと、各人が身につけた美的センス、美意識です。自己<sup>\*</sup>ロマンの強い人は、美醜のルールが強く形成される傾向<sup>けいこう</sup>がある。

ともあれ、高校くらいまでに、人間は、自分の「よいーわるい」と「美醜」のルールを形成していく。で、「自己意識」が強くなるにしたがって、それでいろんなものを「批判」（趣味判断）するようになる。でも、大事なものは、いろんなものを「批評」しあう



ことで、友だちと自分の「自己ルール」を交換しあい、確かめあい、そしてそのことでそれを調整しあっていくということです。

これはちょうど、「哲学のテーブル」で、いろんな人が自分のよいアイディア（原理⇨キーワード）を出しあってあれこれ言いあい、そのことでその「原理⇨キーワード」をだんだん鍛えてゆくと、同じ原理なのです。

じつは、友だちとのこういった「批評」しあう関係によってしか、人は、自分の「自己ルール」を理解することはできません。よく、「他人こそは自分をうつす鏡だ」と言います。人間は他人を通してしか自分を理解することはできない、と。その通りですが、その意味を、哲学的に言うとなるとこんな具合になります。

われわれは誰でも、自分だけの善悪・美醜の「自己ルール」を、いわば感受性のメガネとしてかけている。そしてそれは長い時間をかけて形成されたものなので、誰もこのメガネを外すことはできない。もし青いメガネをかけていたら、すべてが青っぽく見える。メガネのレンズが少しゆがんでいたら、すべてが歪んでみえる。でも、われわれがこのメガネを外せないなら、それがわれわれにとっては「正常な」世界です。

つまりふつうは、自分のメガネが歪んでいるのか、色がついているのか、誰にも決して分からない。このことに気がつくのは、他人がみているものと、自分が見ているものとの違い偏りに気づくときだけです。これを「視線の偏差」とか「視差」と言います。

もしわれわれが、自分の好き嫌い、つまり趣味判断だけで生きていれば、「自己ルール」の形がどうなっているのか、理解することはできない。「批評」しあうことではじめて、人は自分の「良し悪し・美醜」のルールが他人と違うことに気づき、またそれを交換することができるのです。

注 \*美醜……美しいことと醜いこと。

\*ロマン……感情的、理想的に物事をとらえること。



もちろん、他の人もみな自分の「自己ルール」を自分のメガネとしてかけている。だから、例えば相手の感受性や美意識が「正しい」とはかぎらない。厳密に言うると、すべての人が自分なりの「メガネ」をかけているので、絶対に正しい「メガネ」というものはないのです。

しかし、われわれは相互の批評を通して、さまざまな人の「自己ルール」と自分の「自己ルール」との偏差を少しずつ理解し、そのことではじめて自分の「自己ルール」の大きな傾向性や問題性を了解することができるわけです。

じつは、ここに「人間関係」の基本の構図があります。人間関係の基本原理は、「承認ゲーム」だということです（権力関係は承認ゲームの一形式にすぎません）。

親子関係では、親がルールを与えたり、配慮や愛情を与え、子供は何らかの仕方ですぐに認める。友人関係では、いわば親和性（エロス）を与えあう関係です。社会に出たら、利害関係や権力関係という要素が強くなる。それぞれの関係でその内実が少しずつ違うけれど、どれにも共通しているのはそれが「承認のゲーム」だということです。権力（支配）関係は、一方が他方を上位者として承認している関係です。

\*  
ヘーゲルによると、人間の欲望は自己価値欲望です。自己価値は、結局のところ、<sup>⑤</sup>他者による承認を必要とする。それは評価、賞賛、尊敬、配慮、そして愛情などの形をとるが、ちょうど動物の身体が「栄養」なしに生きられないように、また人間の心が、ロマンや情緒を必要とするように、人間の精神は「承認」を必要とするのです。

これは人間の生に必須のもので、例外はありません。人間は本来「孤独」な存在であり、それが人間の本質である、と強く主張する人にとってさえ、この考えを誰かから承認されたいという動機なしには、この主張自体が意味をもちません。

（中略）

すでに見たように、人間にとって他者の存在は、生きることの根本要素です。他者は、一方で、自分に「承認」を与えてくれる唯一の源泉だけれど、また反対に、承認、つまり自己価値を奪う唯一の存在でもある。動物なら、自分が承認されているかどうか

か気にかけないが、人間はそうではない。

この観点からは、誰にとつても他者は、最も極端な両極の意味をもっている。つまり他者は、ある場合には、承認の正反対で、自分を完全に否定する、つまり殺しうる脅威ある存在でありうるし、しかし一方では、自分にとって、生きる上でどうしてもほかの人と取り替えられない、**B**のない存在になる可能性ももっています。

ともあれ、そんな具合で、人間はいろんな他者と関係を作りながら、承認ゲームを生きていく。できるだけ気持ちのよい他者との承認ゲームを作るべく人は生きるのですが、どんなゲームが自分にとってよいかは、人によって違うし、また個々人が事前にそれを知っているわけではない。人間の生はそういう試行錯誤で進んでゆくのです。

重要なのは、このとき、さまざまな他者と関係を作る土台になるのが、それぞれの「自己ルール」だということです。

それぞれが自分なりの「自己ルール」を、とくに親子関係の中で作り上げている。それがその人の感受性、美意識、そして倫理感です。そして、人が他人とつきあうとは、それぞれの「自己ルール」が交わりあい、大なり小なり互いにそれを調整しあいながらやっていく、ということなのです。だから、ある人の「自己ルール」が具合が悪いと、相手の「自己ルール」とうまく調整できません。

たとえば、わがままに育てられた人は、<sup>ア</sup>独善的な「自己ルール」をもち、人にそれを押しつける態度をとり、無意識に他人はそれを認めて当然だと考えてしまう。逆に、親からしつかり愛情と承認を与えられなかった人は、自信がなく、防衛的になり、互いに自然な配慮や親和感を交換することができない。自己ルールが分裂している人は、つねに自己欺瞞、虚偽の意識や無力感をもつことになる。

注 \*親和性(エロス)……親しみ結びつきやすい性質。エロスは愛。

\*ヘーゲル……ドイツの哲学者。

\*倫理感……行動の基準となる善悪および道德的な考え方。本来の表記は「倫理観」。

\*自己欺瞞……自分で自分の心をあざむくこと。

このような各人の「自己ルール」の形をもっと大きく言えば、その人の生への欲望と呼ぶことができます。

そもそも欲望というものは奇妙なもので、欲望があるからわれわれは生きていける。ときどき心の病気で欲望がなくなってしまう人がいます。そういうとき、人はどんなものに対しても希望や可能性をもてない。つまり、何が「よく」て何が「ステキ」（きれい）かのルールが存在せず、生きてゆく理由がなくなる。たいてい不安だけがあるので、とても苦しいのです。

なんらかの欲望をもつとは、根本的に、われわれの生きる理由が現われることです。憧れ、期待、希望、可能性といった「欲望」こそは、われわれの生の土台です。ところが、われわれは欲望を意識的にコントロールすることはできない。欲望はいつでも必ず「向こうからやってくる」、これが欲望の第一の本質です（欲望の「到来性」）。

たとえば、恋の欲望は、われわれにその対象を「告知知らせる」のであって、われわれが自分でそれを決めて始まるのではない。

\* マクベスは、魔女の言葉で、自分の欲望の対象（王様になれる可能性）を、「告知知らされる」。恋の欲望であれ、権力への欲望であれ、それが告知知らされると、生きることの新しいしかも強力な理由が、突如心のうちに出現します。生はわくわくする魅力に満ちたものとなり、人は生きる上での明瞭な目標と、そこへ近づこうとする強い意欲を与えられるのです。

恋の欲望も野心への欲望も、いったん動き出したら、強力な指令となって目標の遂行をわれわれに命じます。しかし、この目標はいつも達成可能とは限らない。もしこの目標が高すぎるハードルであるとき、生きることは苦悩に変わる。そして、しばしばそれは、挫折と絶望をわれわれに与えるのです。

⑥ こうして欲望は、に似ていることが分かる。それはわれわれの一切の生の希望の源泉であり、また一切の絶望の源泉でもあるのです。欲望だけが、生の幸福の源泉だが、また、われわれは、自分の欲望をコントロールすることはできない。その意味で人間は、自分の欲望の奴隷でもあると言えます。

今見たように、われわれは自分の欲望がいつどこからどういう形で現われてくるかを知らないし、あらかじめ予測することもできない。それはあくまで「向こうから」やってきてわれわれをつかむだけです。しかし、一方で、われわれは欲望というものの、一般

構造については知ることができ。欲望はどこから現われてくるのか。それはわれわれの「よし悪し」「美醜」の内的なルールから出てくるのです。

(竹田青嗣『中学生からの哲学「超」入門』)

注 \*マクベス……シェイクスピアの作品『マクベス』の主人公の將軍マクベスのこと。

\*挫折……仕事や計画が中途で失敗しだめになり、気力や意欲をなくすこと。

問一 ～～～線㊦「独善的な」とはどのような意味ですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 ひとりよがりな
- 2 優先的な
- 3 本質的に孤独な
- 4 人よりすぐれた

問二 **A** にあてはまる言葉としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 前者は、後者の考えと一致する
- 2 前者は、後者の考えには及ばない
- 3 前者は、後者の考えとは相いれない
- 4 前者は、後者の考えから取り出される

問三 ——線①「言葉が『たまる』とはどういうことですか。「『たまる』という時間的な経過をふまえて説明した次の文の

**I**・**II** にあてはまるように、**I** は二十字以上二十五字以内で、**II** は三十五字以上四十字以内でそれぞれ書

きなさい。

**I** が **II** になること。

問四 ——線②「他人こそは自分をうつす鏡だ」とありますが、どうすることをたとえたものですか。文中の★の部分から、それが書かれた一文を探し、初めの五字を書きなさい。

問五 ——線③「感受性のメガネ」について四人の中学生が話をしています。筆者の考えに最も近い考えを述べている生徒は誰ですか。次の1〜4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 生徒A 「自己ルール」が「感受性のメガネ」といつているから、目で見たり耳で聞いたりして得られる情報から自分が正しいと思つたものを自信を持つて取捨選択しゆしゃせんたくしていくことが大切ね。

2 生徒B でも、私たちつて知らず知らずのうちに、何かを頭から決めつけてしまつてることが多いと思う。女子は理数系が苦手だとか、男子は不器用だとか。誰に教わつたわけでもないのに、ある考えにとらわれてものを見ていると思うと  
こわいよね。

3 生徒C 考えにとらわれるというなら、インターネットから受け取る情報もこわいよ。一方的に配信して、受け取る側の気持ちなどにはお構いなしなんだもの。傷つけられても、それを訴うったえる機会がないのは問題だよ。

4 生徒D 私もインターネットで動画を観みるんだけど、自分が好きな番組とか、関心があるものしか調べたり観なくなりがちじゃない？ これは「感受性のメガネ」がくもつているせいだからだと思う。

問六 —— 線④「正常な世界」とありますが、なぜ「正常」といえるのですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 歪んだレンズで見る世界は本来異常なはずだが、その異常さを指摘されたり自分がそれに気づかない以上は「異常ではない」すなわち「正常」としかいえないから。

2 歪んだレンズのメガネは外すことができないので、歪みのないレンズで見る世界とは比べられない点において「正常」か「異常」かの比較は意味をなさないから。

3 たとえ歪んだレンズのメガネであっても、長い間かけていることによってその歪みは知らず知らずのうちに正しい方へと矯正されて、結果として「正常」になるから。

4 他の人がどのような見方をしているかは自分のレンズの歪みに気づいた人にしかわからないので、たいていは他の人のレンズが「正常ではない」ことを指摘できないから。

問七 —— 線⑤「他者による承認」にあてはまらないものを次の1～5から一つ選び、番号で答えなさい。

1 赤ちゃんが笑ったり何かを言ったりすると、母親や周りの人はそれに応じて笑ったり赤ちゃんの言葉をまねしたりする。

2 幼稚園の時に祖母の家の大掃除を手伝ったことがあるが、祖母は何年たっても親類の集まる席でそのことを話題にする。

3 スーパーの会計で、ポイントがたまっていたので買い物に使えるか聞いたところ、使えますという返事をもたらった。

4 自分が足をけがした時、学校で教室へ行くまでの階段ではいつも誰かが自分の荷物を持ってくれた。

5 通学路でいつも見守りをしてくれるおじさんにあいさつをしたところ、「今日は声がかれてるね。風邪気味なの？」と聞かれた。



問八 B にあてはまるもつとも適当な言葉を考えて、ひらがな四字で書きなさい。

問九 ー 線⑥「こうして欲望は、に似ていることが分かる」のにあてはまる言葉としても適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 環境
- 2 苦悩
- 3 人生
- 4 他者

問十 ー 線X「友だちとのこういった「批評」しあう関係によってしか、人は、自分の「自己ルール」を理解することはできません」とありますが、あなたの周りでこの言葉にあてはまる具体例をさがし、どのような「自己ルール」を理解したのか百字以上百二十字以内で説明しなさい。ただし、本文に書かれている例以外を用い、相手は友だちでなくともかまいません。



次の1～6の——線のカタカナは漢字で書き、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- 1 若い苗<sup>なえ</sup>を庭にイシヨクする。
- 2 君の目はフシアナか。そこに書いてあるだろう。
- 3 コツカクの標本を作る。
- 4 人体に危害を及<sup>およ</sup>ぼすゲキヤクには注意が必要だ。
- 5 車がコシヨウしたので電車で出かけた。
- 6 木材に文様<sup>ぶんざう</sup>をほどこす。

問題は以上です

二〇二二年度 入学試験解答用紙〔国語〕（五〇分）

第一回二月一日実施  
吉祥女子中学校

一

問一 ア

イ

問二

問三

受験番号

氏名

得点

問五

40

問六

問七 (1)

(2)

問八

問九 (2) (1)

40

問一

問二

問十

問十一

問十二

二

問三 II I

25 が

35

40

20

ひらがま

問六

問七

問八

問九

問四

問五

問十

120

100

三

4 1

ゲ キ ヤ ク

イ シ ヨ ク

5 2

コ シ ヨ ウ

フ シ ア ナ

6 3

文 様

コ ッ カ ク